
リレー小説「恋愛編」

唐錦・綾鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リレー小説「恋愛編」

【Nコード】

N6155V

【作者名】

唐錦・綾鷹

【あらすじ】

恋愛のことなどまったく知らない二人がお送りするリレー小説。展開はあとからついてきます。

プロローグ（前書き）

はじめまして。唐錦です。出だしいきます。よろしくお願いします。

プロローグ

俺が祖父の実家で暮らし始めたのは、中学を卒業する間近のことである。それ以前に住んでいた場所のことはよく覚えているが、母の記憶とともに、思い出となっている。

八歳年上の兄が家を出た後、俺と母はふたりで暮らしていた。兄がどこへ行ったのかも、何をしているのかも、俺は知らない。

幼い俺は父の顔を知らずに成長した。物心ついた時にはすでに、母と、歳の離れた兄しかその家にはいなかった。中学校へ上がる頃には、母との二人暮らしが当たり前になっていた。

決して裕福ではなかったが、不満はなかった。友達が流行のゲームで遊んでいるのを見ても、不思議とそれが欲しいとは思わなかった。幼い頃は母にものをねだったりもしたが、その都度、テレビゲームなんかよりもっとおもしろいものがある。と兄が俺を外に連れ出してくれた。川で魚を釣り、山で虫を獲った。落とし穴を作って見ず知らずの人を落としてみたりもした。そして、泥まみれで帰る俺たちを、母は笑顔で迎えてくれた。俺たちが揃って遊びに出た帰りには、決まって母の手作りのプリンが待っている。俺は母のプリンが大好きだった。三人で食べるプリンは、どんな食べ物よりも上等だった。

俺が十一歳になってしばらくの頃、兄は、帰りが遅くなると言い残したきり、そのまま帰ってこなかった。母に尋ねても、気まずそうに微笑むだけだった。

その頃から、母は病院へ通うようになった。

もともと丈夫とは言えない体に鞭を打って、子供二人を育ててきたのだ。病気の原因はそれだけではないかもしれないが、俺は母親の優しさを噛み締めた。それと同時に、兄への憎しみが湧いてきた。兄は俺たちを捨てたのだ。母がこんな状態になっているというのに、

顔も見せず、どこにいるかも分からない。思い出にちらつく兄の面影は、すでに怒りに飲み込まれていた。

俺が十五歳になるころには、母の症状はますます悪化していた。日に日に痩せていく母を見るのは辛かった。仕事も辞めて床に伏せることが多くなり、炊事洗濯は俺の役目になっていた。母の綺麗だった長い黒髪も、くすんだ白に変わっていった。母が入院することになったあとも、俺は学校の帰りに毎日病院へ通い、母の話し相手になった。

学校生活は楽しくなかった。俺の家庭事情は誰もが知っていた。友人も、教師でさえも、憐れみの眼差しを向けてくる。中には親しげに話しかけてくる者もいたが、校外での付き合いは遠慮しているようだった。母には、学校であったあたりもしない行事を語ったり、いない友人との会話を聞かせていた。

しばらくして、医者から退院しても良いとの指示が出た。俺は喜びの反面、病状は改善されていないように見えたのに、何故なのかと不思議に思ったが、今思えば末期だったのだろう。家に帰りたいという母の意志も尊重したのかもしれない。母は歩くのも精一杯になっていた。

母が家に帰ってきてからしばらくして、学校から課外授業の予定が出た。近くの山へ出向き、自然を体験するという内容だった。幼い頃の記憶が頭をよぎった。兄は今、どこにいるのだろうか。ふとそんなことを思ったが、すぐに考えるのをやめた。

俺は母が寝ているベッドの横の椅子に腰掛けて、事情を説明した。「セイちゃんが行ったら、きっと人気者になっちゃうね。お兄ちゃんに色々教えてもらったんだもの。楽しんできてね」

昔と変わらない笑顔で母はそう言った。母は兄が憎くはないのだろうか。自分が病に倒れているというのに、顔も見せない兄が。思わず問い質しそうになったところで口をつぐみ、俺も笑顔を作った。

「ああ、でつかい虫を捕まえて、みんなを驚かせてやるよ！今なら兄さんにだつて負けないよ！」

母に余計なことを言う必要は無い。例え口から出任せでも、母を笑顔にしたかった。

俺は立ち上がり、笑顔のまま母に背を向けると、部屋の扉を開けた。

「セイちゃん………」

廊下へと足を出そうとした時、うしろから母の声がした。俺は振り返り、母を見る。

「どうしたの？」

と俺が聞くと、しばしの沈黙のあと、母が口を開いた。

「お兄ちゃんのこと、責めないであげてね………」

俺は呆然とした。言葉の意味がすぐには理解できなかった。俺は驚きを隠せないままどう返していいのか分からず、そのまま部屋から出てきてしまった。

課外授業当日、出発は昼からで、帰ってくるのは夕方過ぎになる。母のことが心配ではあったが、医者は安静にしていれば、しばらくは病状が急変することはないと言っていた。それに、何かあっても俺の携帯電話の番号は教えてある。俺の携帯電話には、自宅と学校と病院しか登録されていないので、着信があればすぐに分かるのだ。出発間際、俺は母の元へ行き、いつてきますと告げた。母は笑顔で送り出してくれた。

課外授業では案の定、俺は浮いていた。母の言っていた人気者ではなく、まったくの逆として。結局、俺は何もしないまま、教師に先導された道を歩いていただけだった。

解散後、母へどんな話をしようかと考えながら帰途についた。楽しく、おもしろい話をしなければならぬ。自宅へ着き、玄関の鍵を開けようとしたとき、異変に気付いた。

鍵が開いている………。

突如悪寒が走った。背中を冷たい汗が流れる。母は家から出ることはない。出る事自体はできるだろうが、そんなことをしていい状態ではない。考えられることはいくつかあったが、俺はすぐに扉を開け、母の部屋へと向かった。しかしその途中、通りがかったリビングで俺は足を止めた。リビングの椅子には母が座っていた。机に上半身を預け、うつ伏せで眠っているようだった。机の上にはスーパリーの袋が無造作に置かれていて、一目で買い物に行ったのだと分かった。ここから一番近いスーパーまでは、俺でも徒歩では疲れる距離にある。出歩けるような状態ではないのに、何故わざわざそんなことを。

俺はリビングに入り、母の背中に手を置き、そして異変に気付いた。

母は、息をしていなかった。

そこからはあまり覚えていない。俺は泣きながら怒鳴るように救急車を呼び、あとは瞬く間に事が運んでいった。

ただ覚えていることは、救急車を待っている間、俺は机の上にメモがあることに気付いた。筆は乱れ、なんとか読めるような状態だったが、間違いなく母の字だった。そこにはこう書かれていた。

ごめんね。プリンつくったんだけど、いっしょに食べられなかったよ。きつとおいしいから、かえってきたら、ちゃんと食べてね。ごめんね

救急隊員が駆けつけたとき、俺は半ば放心状態で、母の横でプリンを食べていたそうだった。

母の葬式が終わるまで、俺は完全に蚊帳の外だった。今までどこにいたのかと思うような、親戚や知人と名乗る人たちが参列していた。

そのあと、俺は母方の祖父の所へ引き取られることになった。中

学卒業までは電車でこちらに通い、高校は祖父の実家の近くへ通うことになった。

あとから聞いた話だが、祖父は母を勘当していた。身元も分らない男と子供を作ったことで、家を追い出されたのだ。それから連絡は取っていかなかったらしいが、今回の件で母が病気だったことを知ったらしく、俺のことも初めて見たらしい。祖父はいく、「俺の孫なら俺にしか育てられん」とのことだ。どういう理屈でどの口が言うんだとも思ったが、話してみるとそれほど捻じ曲がった人でもないらしかった。とある一件でこの人に対する信用が確立したのも事実だ。

生活が急変する中、戸惑っている暇などないほどに目まぐるしく時は流れ、俺は高校に入学した。町も、人も、全てが違う遠く離れたこの地で、俺は新たな生活を送る。

新しい制服の袖に腕を通すと、不思議と身が引き締まるのを感じた。『神崎勢一』と刻まれたネームプレートを左胸に付ける。階段を降りるとすでに祖父は起きていて、朝食をとっていた。

「おい、メシは？」

そう言う祖父を横目に居間の前を通り過ぎる。

「今日はいい」

いつもの調子で祖父に返事をする。

「今日はって、いつもじゃないか。たまには食っていけよ。力が出ないぞ」

居間から顔だけを出して廊下にいる俺に祖父が言った。

「俺は朝食べなくても大丈夫にできてるんだよ。いつてきます」

俺は慣れない革靴を履きながら後ろにいる祖父に言った。おういつてこい！という声が返ってくる。

最初こそ俺は祖父に敬語を使っていたが、祖父に堅苦しいからやめろと言われてからはずっとこの調子だ。

立ち上がると、下駄箱の上の母の写真に手を合わせた。

「母さん。行ってきます」

扉を開けると、まぶしすぎる朝日が身体を照らした。思わず目を細める。目が慣れると、学校への一步を踏み出した。

今日は入学式だ。

ブログ（後書き）

当初400文字程度で交代のはずが、いつのまにかこうなっていました。ブログだし、仕方ないよね！

お読みいただきありがとうございました。

第1話 心中（前書き）

今回はわたくし綾鷹の回です。楽しんでいただければ幸いです

第1話 心中

退屈な日常、孤独な日々、ぼんやりとした憂鬱という奴らと長く付き合っていると、それほど気にもならなくなるものだ。

俺にはひとつ、悟っていることがある。平凡な奴が夢など持つてはいけないということだ。

願いとすなわち、心の振れ幅を大きくする行為だ。

期待を持って前向きに振れることは一見して輝かしい状態ではあるが、その願いが叶わぬことで生じる絶望、後ろ向きへの振れ幅は、前への振れ幅と同じか、もっと大きい。

俺のような凡庸な人間には、まったくもって無駄な行為だ。

だから俺は、前にも後ろにも触れないこの平凡な日々と同化する。それはけっして居心地が良いものじゃない。けれど、若干後ろ向きに振れて止まってるぐらいが安定するんだ。

そんなふうに俺は、言わば心のメトロノームを大切に扱っていた。何があっても喜ばず、何があっても悲しまない、——壊れたメトロノームを。

第1話 心中

高校生活のスタートは眠くなるような入学式の幕開けに始まり、退屈すぎる校長の挨拶で熟睡の域に達し、クラスでのありがちな自己紹介で昏睡状態となり、それでもなんとか生還した俺は、おぼろな意識の中で下校を許された。

正直な話、そのときにはすでに何があったのかほぼ忘れた。クラ

スメイトの自己紹介など一つも頭に入っていない。

この学校の入学生は近くの中学から上がってきた人間ばかりで、俺のクラスでは初日からそれぞれの中学でグループを作っているようだった。遠くの中学から入ってきた俺はまるで転入生のような存在だ。

とはいえ、これは理想的な状況とも思えた。孤独は良い。波風の立たぬ凧のような、穏やかな高校生活を過ごせる。

俺がすぐに下校しなかったのは、そんな理想的ライフスタイルをさらに安穩にするための場所を探していたからだ。

要するに、一人になれる場所。

男子トイレの個室は一人にはなれるが、授業中でもなければたいして落ち着ける場所じゃない。

図書室は良いアイデアではあるものの、俺だけの場所ではないという点で住処すみかにはできない。

校内にいくつかある非常階段は使えそうではあったが、どうも外から目につきやすい。

1階、2階、3階と目星をつけながら順々に見回っていき、当然ながら最後に屋上へと行き着いた。

この学校の屋上は施設がされており、許可なく立ち入ることを禁止している、と教師が話していたような気がしたが、なんてことはない、簡単に扉は開いてしまった。

——青天井の下に出た瞬間、女子の姿が目映った。

彼女は、胸の高さほどの屋上の縁に立っていた。

屋上に現れた俺に振り向いた彼女の長い黒髪が、春風に吹かれてなびく。こめかみの髪を耳にかけける仕草を、俺は茫然と眺めていた。まるで同じ世界の住人とは思えぬほどに、細部まで作りこまれた人形であるかのように、——恐怖さえ感じるほどに神秘的な美貌だった。

腰にまで垂れる黒髪は黒曜石のように艶やかで、抜群の均整で描かれたもののような身体の曲線は、どこにも描き直すべき箇所を見つけれない。

凜とした背筋はセコイアの如く真っ直ぐに伸びていて、実際彼女が立っているところよりもさらに高みから見下ろされているかのような錯覚に囚われる。

いや、むしろそれは、直視には耐えがたいほどに強い眼光、揺るぎない自信に満ち溢れ、この世のすべてを見通しているかのような双眸こそがそう感じさせているのかもしれない。

だから俺は彼女が口を開くまで、彼女がそこで何をしようとしていたのか、まるで見当がつかなかった。

「……ね、君、私と一緒に死のう？」

長い黒髪の女子は、無表情でそう言った。

俺は何も答えなかった。現実感が酷く淡い。目の前の状況を理解しようとさえ思わなかった。

ただなんとなく、俺は彼女に近づいていった。街灯に吸い寄せられる虫のように、考えるよりも先に足が動いていた。

「私、死にたいって人たくさん見てきたからわかるの。君、死にたいんでしょう？」

肯定も否定もしなかった。そんなことをする前に、俺は屋上の縁に手をかけて上っていた。

「行きましょ」

俺の返答を待つことなく、彼女は俺の手を引いて屋上からダイブした。

ここに至っても、俺の心のメトロノームは壊れていた。ただぼんやりと、あの日、テーブルに伏して眠るように死んだ母の横で食べたプリンの味を思い出していた。

美味しかった。本当に美味しかった。あの日以来、何を食べても味がしない。最近の食事は、紙や粘土を食べているようなものだった。

地面が加速しながら迫る。どこにでもあるような土の平面が、今は命を奪う凶器と化している。

恐怖を感じなかった。握った手のひらから、名前も知らない女子の体温を感じる余裕すらあった。

動かない。壊れたメトロノームは微動だにせず、砕けて散る。土の染みとなって、消える。

嬉しくも、悲しくもなかった。

視界が暗転すると同時、全身を突き抜けるような衝撃が襲う。

体が高速で転がるのがわかり、硬い地面を背にして止まった。視界はなおも開けず、なぜか温かい闇に包まれていた。

温もりを持った闇が、ゆっくりと遠ざかった。同じ速度で、視界が戻ってきた。

闇が光に色あせていき、それはついに屋上で出会った女子の姿になった。

「サヤ様の安全を確保！状況を常務C班へ委譲し、特務A班は撤収する！」

寝そべったまま横を見ると、軍服姿の男たちが分厚いマットを持ち上げて去っていく姿が見えた。

「私、いつもあいつらに邪魔されて死ねないの」

彼女の顔も制服も土にまみれていた。大変なことがあったはずなのに、しかし何事もなかったかのような無表情だった。

こいつのメトロノームも、きつと壊れているんだろう。

「ね、あなた、まだ死にたいって思ってる？」

上体を起こした俺は彼女を睨み、しかし無言でうなずいた。

「そう……、嬉しい。こんな目に遭ってまだ死にたいって言った人、あなたが初めて。だって死にたい死にたい言ってた人だって、私と一緒に死にかけたら、もう死にたくないって言うから」

太陽を背にして彼女が立ち上がる。そして、すらりと伸びた足の根、美しく窪んだ腰に手を当てた。

「私は九ノ瀬早矢^{このせ・さや}。あなたは？」

「神崎……勢一」

「勢一君、あなたとならきつと、上手くやれる気がするわ」
言って、彼女は俺に手を差し伸べてきた。

「いつかきつと、一緒に死にましよう」

訳のわからぬ状況、名前を知っただけの関係で、とてつもなく重い契約を要求されていた。

それなのに俺は、迷うことなくその手を取った。そうすることが
まるで、はじめから決まっていたかのように。

鳥が飛ぶように、魚が泳ぐように、馬が走るように、俺はその手
を握った。

そのときはじめて、彼女がふつと笑った。

それは本当に久しぶりに、メトロノームが揺れた瞬間だった。

第2話 九ノ瀬早矢（前書き）

唐錦。いきます。

第2話 九ノ瀬早矢

「おかえり。おお？入学初日からケンカか？若いねえ」

帰宅した俺を、祖父の驚きの声が迎える。砂と土にまみれた制服を見れば当然の反応だ。

「ただいま。そんなわけないだろ」

俺の性格と見た目を知っていれば、ケンカという発想が出てくるのはおかしかった。俺は靴を脱ぎながら祖父の発言を否定すると、階段を上がっていく。

「なんでもいいが、制服は大事にしるよ。安くないからな」

祖父の声を背中で受け、俺は二階にある自室に向かった。

祖父の家は様式こそ古臭いものの、二人では持て余すほどの広さだった。一階には台所、十畳の和室と祖父の部屋、物置。和室には縁側があり、そこから庭へと出ることができる。二階への階段を上がると、俺の部屋の他に、使っていない部屋が2部屋ある。トイレはふたつの階にそれぞれ設置してあった。俺が引越してくる前までは二階は全く使っていなかったらしく、初めて自分の部屋を案内された時も、埃との戦いが最初だった

俺は自室に入り、ベッドに横たわる。天井を見上げながら屋上で出会った彼女の言葉を反芻する。

いつかきつと、一緒に死にましよう。九ノ瀬と名乗る彼女はそう言った。彼女と手を繋ぎ、屋上から飛び降りた。重力に引き寄せられて地面へと急降下する感覚が鮮明に蘇る。落下しながら握り続けた彼女の手は、陶器のような白さとは裏腹に、暖かく、柔らかかった。

俺は自分の手のひらを天井へと向け、ゆっくりと握った。俺は落下する最後まで、彼女の手を握り続けていたのだろうか。

そして一つの疑問が頭をよぎった。何故ひとりで死のうとしないのか。まるで俺を待っていたかのように屋上に佇んでいた彼女。そ

してあの第一声。まるで俺の心を見透かしているような数々の言葉。彼女への興味が、自分の中で膨らんでいくのを感じた。階下から夕飯を知らせる声が聞こえ、俺はベッドから起き上がった。

第2話 九ノ瀬早矢

翌朝、登校した俺を待っていたのは生徒達からの奇異の眼差しだった。教室に入るなり、それまでざわついていた室内が静まり返り、視線が突き刺さる。なるほど、彼女の奇行は昨日に始まったことではないらしい。俺が席に着き、一息つくころには、教室は元のざわめきに戻っていた。教室の前方に目を向けると、楽しそうに会話をしている女子生徒の横に、動かない人影が座っているのを見つけた。周りの女子生徒は、そこに誰もいないかのように真横で談笑をしている。黒く真っ直ぐ伸びた長い髪。九ノ瀬早矢だった。

「ようヒーロー。昨日はお疲れだったな」

鞆を机の横にかけたとき、右の席に座っていた男子生徒が話しかけてきた。

顔だけをそちらに向けると、短髪の快活そうな男子が、こちらに向かって座っていた。ネームプレートには「東堂 正樹」と刻まれている。

「初めまして、だね。東堂だ。よろしく」

名前を告げた東堂は、俺に右手を差し出した。一瞬迷ったが、こちらこそ、とそれを握り返す。意外だな、とばかりに眉を上げる東堂。

「もつとつれない奴だと思ったけど、そうでもないみたいだね」
手を離れた東堂は二カリと笑う。

「君は俺のことを知っているみたいだけど」

自己紹介は入学式の終わったあとに一人ずつしたが、東堂の最初の言葉にはそれ以外の含みがあった。

「気付かないの？もうみんな知ってるさ。入学初日に九ノ瀬と一緒に屋上から飛び降りたってね」

「彼女は有名なのか？」

「九ノ瀬のことを知らないで騒いでる奴も大勢いるだろうよ。見たって奴も少ないし、噂話の域を出ないね」

東堂は、九ノ瀬の座っている方に目だけを向けてそう言った。

「東堂は九ノ瀬のことを知ってるのか」

「同じ中学だからね。あいつのことは色々知ってるよ。心中未遂もお前で三人目だ。もつとも、俺が知る内で、だけど」

そう言う東堂から目を離し、九ノ瀬に視線を移す。九ノ瀬の横には、いつの間にか一人の男子生徒が立っていた。男子生徒は両手の前に出して、何かを訴えているようだった。九ノ瀬は座ったまま一言二言男子生徒と会話をすると、そのまま教室の外へと二人で出て行った。

俺は東堂に視線を戻し、いくつか質問をして、九ノ瀬早矢について聞いた。東堂は喋るのが好きらしく、こっちが一のことを聞くと、十にして返してくるようだった。

彼女は隣の中学校から入学してきたらしい。異質さはそのころから健在だったらしく、周りから浮いていたという。それでも美しい顔をしているので、言い寄ってくる男もいたそうだが、中学三年になる頃にはそれも途絶え、周りからは完全に距離を置かれていた。心中未遂の噂が立ったのもその頃からだった。東堂が知っている内の一人目は登校拒否になり、二人目はトラウマを植えつけられ、九ノ瀬の顔を見るだけで失禁した。

無表情で無感動、人形の様な美貌と他者を寄せ付けない雰囲気。

妖しげな魔術師のような彼女に、軽蔑の眼差しを向ける者もいれば、崇拜の念を持つ者も少なくなかった。いつしかそれらは同盟を組み、親衛隊を作り上げた。彼らは九ノ瀬早矢を陰ながら見守り、有事の際にはどこからともなく颯爽と現れるのだという。これは九ノ瀬の意思とは関係なく行われるらしい。九ノ瀬がこの高校に入学をした後も、彼らは後を追うようにこっそり入学したそうだ。しかもこの親衛隊には謎のバックアップがあるらしく、学生という範疇を超えた行動力や技術力を時に見せるらしい。

「まるで宗教だね」

「いや、国を守る軍隊に近い」

東堂の言葉に、俺は昨日の軍服達を思い出した。確かに、文字通り軍隊のようだった。

「そもそも、なんであんな鉄仮面に入れ込んでるのかねえ。俺はあいつの笑つてるとこすら一度も……」

言葉を途中で切って、東堂は止まった。口を開けたまま、視線を俺の左へと向けている。どうしたのかと前を向くと、俺の机の前にいつの間に教室に帰ってきたのか、九ノ瀬が立っていた。窓からの風に、前髪が揺れる。

「おはよう」

俺がそう言くと、九ノ瀬は無表情のまま挨拶を返してきた。東堂は今だ固まっていたまだ。

「何の話をしているの？」

「君のことを聞いていた」

「そう」

彼女は驚く様子もなく返事をする、ちらりと東堂の方を見て、またすぐに俺を見る。

「放課後、話があるの。待ってるわ」

彼女はそれだけ言っていると振り返り、自分の席へと向かっていく。近くの女子たちが、彼女を見ながら、聞こえない声で話しているのが見えた。

「お前、どんな方法を使っただんだ？」

信じられん、と、やっと動き出した東堂が言った。

「今まで、九ノ瀬の方から男に話しかけるなんて、ましてや待ち合わせ。俺は見たことがないぞ」

食い入る東堂に答えようと、人差し指を上へ向ける。

「一緒に落ちた」

なるほど。と東堂は笑いながら短い前髪を掻き上げた。

「そりゃあ真似できんわ」

今日はまだ授業は無い。写真撮影と校内の施設設備の案内、部活動の説明など、夢見る高校生活を色付ける数々の退屈な時間を過ごし、俺は放課後を待った。

放課後、談笑しながら教室を出て行く生徒たちに紛れて、一人で歩いていく九ノ瀬を、俺は席から眺めていた。

「行くのか？」

そう言って立ち上がる東堂に、俺は目を合わせた。

「やっぱ行くよな。んじゃまた明日」

別れを告げる東堂に右手を上げる。

教室に誰もいなくなっただのを確認すると、俺は立ち上がった。

九ノ瀬は待っているだけ言い、場所は聞いていない、それでも彼女が待っているであろう場所に向かうことは容易だった。俺は昨日と同じように非常階段を上り、屋上の扉を開け放つ。冷えた外気が肌を刺激した。

昨日、彼女が立っていた場所に目を向けるが、そこに九ノ瀬の姿はなかった。俺はゆっくりと屋上を歩く。青空の先に飛ぶ、小さな飛行機の音が聞こえる。手すりに手をかけ、下を覗いた。昨日、ぶつかる筈だった地面が見える。あのままあそこに落ちていたら、今頃白い人型の線が二つ、描かれているのだろうか。

「来てくれたのね」

ふいに、後ろから声がした。俺は反射的に振り向く。辺りを見回

すが、声の主の姿は無い。

「ここよ、ここ」

もう一度声がした方を向く。そこには金網の柵があり、その先に給水タンクが設置してある3メートルほどの四角いコンクリートの塊があった。九ノ瀬早矢はその上に座っていた。

「そっちに行ってもいいかい」

僕は日差しを手のひらで遮りながら、彼女を見上げて言った。

「かまわないわ」

彼女がそう言ったのを確認すると、俺は金網に手をかけた。

金網を乗り越えて、梯子を登る。九ノ瀬が座っている反対側、ちようど梯子を真ん中にして、端と端になるように座った。

「話って？」

俺は九ノ瀬に、ここに呼び出した理由をたずねた。

「そうね、まずひとつ」

彼女は俺に声をかけたあとからずっと空を眺めていた。俺がここに座ってから、それは変わらない。

「その金網、扉が付いてるわ」

彼女が指差した先、俺がよじ登ってきた所の向かい側に、金網をそのまま加工したような扉が付いていた。

「教えてくれればよかったのに」

俺がそう言うと、次からはそうする、と彼女は静かに言った。

「あなた、ああいう人ともお話ができるのね」

すぐに東堂のことだと分かった。この学校にきて、まともに会話をしたのは、九ノ瀬と東堂だけだった。

「意外だったわ」

それとも、と彼女は続けた。

「話せているように見えるだけかしら」

九ノ瀬が俺を見る。またあの眼だ。全てを見透かすような、硬く閉ざした心の鍵穴を射抜くような眼差し。

「どうだろうね。俺は彼と話していて楽しい」

「また意外なことを言うのね。なによりだけれど」

そう言っただけで彼女は首を傾げた。

「話したいことはそれだけかい」

俺がそう言うと、彼女はまた空を見上げた。まるで血管が透けて見えそうなほど白い彼女の肌が、日差しを受けて輝いていた。

「別に用事はなかったのよ。ただ話してみたかっただけ。迷惑だったかしら？」

彼女の質問に、別に、と答えると、俺は彼女の方を向いた。

「それじゃあ、俺からも一ついいかな」

彼女は横髪を指先で掻き上げて、横顔を向けた。

「どうぞ」

相変わらずの無表情。

昨日見せた笑顔が、気のせいだったと思いきやそうになる。俺は彼女の眼を見据えて、疑問をぶつけた。出来るだけ直接的に、完結に、余計なものは省いて。

「ひとりで死ぬのは、怖いかい」

遠くに聞こえていた飛行機の音は、いつしか聞こえなくなっていた。残った春風の音に、彼女の髪がなびく。

第2話 九ノ瀬早矢（後書き）

読了感謝。ありがとうございました。

第3話 委員会（前書き）

綾鷹、いきまーす！

第3話 委員会

ふふ、という微笑が風に流れてきた。

「あなたって冷たい人ね。私には興味がないのに、私が一人で死のうとしないことに興味があるなんて」

九ノ瀬はどこか達観したような微笑みを作っていた。俺の目を確認に見つめているはずなのに、その焦点は遙か遠くにあるようだった。

彼女はそれから肩を少し上げて、今度は子供っぽい無邪気な笑顔になった。

「くやしいから、その質問には答えてあげない」

背筋から後頭部が、さあっと痺れた。

この感じはなんだろう？

気味が悪くなって、俺は彼女から視線を逸らす。

「……でも、嬉しくもあるの。あなたはきっと、私に似てるから」
言っと、九ノ瀬は梯子を滑るように降りて、足早に去った。

離れていく彼女に、俺は視線を送らなかった。

最後の言葉を彼女がどんな表情で言ったのか、本当のところ、俺は気になっていたはずなのに。

第3話 委員会

それから俺はしばらく屋上でぼんやりとしていた。

ゆつくりと流れる雲は、一緒にいて一番安らげる相手だ。何も語らず、何も思わない。気を合わせる必要すらない。

九ノ瀬の言葉が頭から離れない。

「あなたはきつと、私に似てる」

不思議な奴だ。東堂は彼女を無表情で無感動だと評していたが、しかしあいつは俺の前で二度も笑顔を見せた。

それは俺が大事な心中相手だからだろうか。何がしかの計算の上に作られた表情なのだろうか。確かに、九ノ瀬の顔には作り物のような美しさがある。不自然な雰囲気だ。

けれど、さつきこの目にした無邪気な笑顔には幾ばくかの温度を感じた。だから俺は動揺……そうだ、焦ったんだ。

そもそも俺は、九ノ瀬にあんなことを訊いて、どんな答えを知りたかったんだろう？

俺が家族でもない誰かに個人的な質問をすること、自分以外の人間に対して興味を持つことなんて、前にあったのがいつだったか思い出せないくらい稀なことだった。

冷たい人……か。きつとそうなんだろう。

最初に九ノ瀬に訊ねるべきだったのは、彼女がどうして死のうとしているのか、その理由のほうではなかったか。だから彼女は、俺をそう評した。

空にあつた視線を下方に傾ける。俺は給水タンクから飛び降りて、屋上の出入り口の扉のノブに手をかけて引いた。

瞬間、視界を闇が覆った。

悲鳴を上げる間もなく、縄のようなものが体に巻きつけられて手足の自由が奪われる。

「声を出すな。抵抗するな。大人しくしていれば手荒な真似はしない」

低い男の声が耳元にささやかれた。

「目標Aを確保。状況終了。委員会へ通達」

同じ声が、軍隊のようなことを話している。視界が遮られているが、俺には少し心当たりがあった。例の、九ノ瀬の親衛隊の奴らの仕業ではないだろうか。

それから俺は、おそらくは数人に担がれるようにして運ばれていた。その間、俺は一言も声を発さなかった。

抵抗したところで無駄だろうし、質問をするならどこぞに運ばれて拘束を解かれたからのほうが良いと判断したからだ。

数分もしないうちに俺はどこかの部屋に運ばれて、固い床に下ろされた。

拘束が解かれ、視界が開けたとき、目の前には腕組みした制服姿の女子が仁王立ちで俺を見下ろしていた。

「あんたが神崎勢一？ ふーん、なんだかぱつとしない奴ね」

「ここはどこだ」

周囲を見回す。昼間なのに、酷く暗い部屋だ。天井に一つだけある明かりはオレンジ色のダンライトのみだった。

「どこでしょうね？ あなたが通ってる学校の中にあるのは確かだけれど、この場所は教職員だつて知っている人はわずかなのよ」

含みのある笑みを落としてくる女はキツネを思わせるような目つきと高い鼻だが、その大人びた顔つきに反して、長い髪はツインテールに結われていた。

「君は……誰だ」

「残念ながら、あなたには自由に質問する権利なんてないのよ。でも、その程度だったら答えてあげてもいいかもね。ほら、私たちつてこれから協力し合っていく仲だもの」

「どういう意味だ？」

「ええ、いいわ。その質問にはこれから丁寧に答えてあげる。けどその前に、挨拶くらいきちんとさせてもらえない？」

彼女がそう言うやいなや、天井で光るダンライトが七つに増え、

その下に立っている人間たちを浮かび上がらせた。

誰も彼もが舞台の黒子のような頭巾を被っている。しかし首から下は、男子や女子の制服姿だった。

「委員会へようこそ、神崎勢一くん。私たち執行委員一同は心よりあなたを歓迎するわ」

まるで獲物を睨むような目でそう言う彼女の口はしかし、その両眼とは裏腹に歯を見せて笑っている。

「そして、共に言いましう。平凡で平穩、安樂で安全な高校生活に——さよなら、と」

高校生活二日目の俺に、まるで死刑宣告でもするかのように彼女は言った。

それは実際、すでに記憶から消えてしまった始業式での校長のそれに比べたらよっぽどシンプルで記憶に焼きつく挨拶だった。

第3話 委員会 2（前書き）

唐錦。いきます。

第3話 委員会 2

「委員会……？君たちは九ノ瀬の親衛隊じゃないのか？」

目の前に居るのは女子、そして周りにいる者の異様な出で立ち。親衛隊の奴らとは雰囲気が違う気がした。

「ああ、あいつらにはあんたの拉致を手伝ってもらっただけ。報酬があれば結構便利に動いてくれるわ。限度はあるけどね」

報酬、という言葉が少し気になったが、なんとなく予想が付いたので無視した。

「じゃあ、君たちは……」

「委員会って言うてるでしょ！」

だからなんのだよ……。という言葉が咽から出かった。委員会、という言葉だけでこの空間と周りの者達の存在に納得できるはずがない。しかし、まずはこいつらの存在は置いといて、今のこの状況を理解することを優先するべきだと俺は考えた。そうすれば自ずとこいつらがなんなのか分かってくるだろう。

「とりあえず、いつまでそうしてるつもり？」

腕組みを解いて、両手を腰に当てながら目の前の女子は言った。

少し傾げ気味の目線は相変わらず威圧的だ。俺は立ち上がると、乱れたネクタイを正し、女子と向き合った。意外とその背は低く、俺の胸ほどが頭の位置となる。女子の平均身長からみても低いほうだ。「生意気ね。座らせたままのほうが良かったわ……」

女子の眉間に皺が寄る、目線が変わっても、目つきはそのままだ。いや、むしろ陰悪になったか。

「ちよつと、あれ持ってきて！」

彼女がそう言うと、一人の黒頭巾が返事をして彼女に近寄る。手にはコの字型の台を持っていた。彼女の前にそれを置くと、黒頭巾はそそくさと元の場所に戻っていった。

彼女が台に乗る。目線が俺とほぼ同じになると、彼女は片方の髪

を後ろに払い、満足げに鼻息を漏らした。

一連の動作にあえて何も言わず、俺は彼女を見る。

「東堂映花よ」

台の上で腰に手を当てたまま彼女はそう言った。

「東堂？」

聞き覚えのある苗字に、思わず聞き返す。

「映花でいいわ。あんたのクラスに弟がいたわね。どうでもいいけど」

俺の意図を理解したのか彼女がそう答える。確かにどこことなく面影はあるが、弟というよりは兄と言ったほうがしっくりくる気がした。

彼女の言う通り、今はどうでもいいと判断した俺はそれ以上は詮索しない事にした。

「まずは説明が必要ね。どこから始めようかしら……」

腰に当てていた片手を口元に持ってきて何かを考え始める。さつきからの質問にまともな答えを返さなかったのは無意識なのだろうか。

口元にあつた手が俺を指刺した。

「というわけであなた、委員会に入りなさい」

「いやおかしいだろ」

どこから説明しようか、と言った直後に出てくるとは思えない発言を、俺は反射的に否定した。

「なんでよ」

「こんな得体の知れない会に、理由もなく入るわけがないだろ」

「ふーん」

俺の言葉に、映花は目を細める。

「初対面の女と屋上から飛び降りたのに？なんで？」

返答に詰まる。映花が何故それを知っているのかは大したことはない。彼女の弟もそれを知っていたし、噂は広がっている。

俺は何故、九ノ瀬と屋上から……。あの時俺は何を考えていたの

か……。ただ流れるように手すりに手をかけ、彼女の手を握っていた。落下すればただでは済まない高さを、一緒に落ちた。死にたいとは思っていなかった。だが生きたいとも思っていない。

そういえば俺は、あの時の彼女の問いに、まだ答えていない。

「あなた、死にたいんでしょう？」

九ノ瀬が俺の質問を保留にした理由が、なんとなく分かった気がした。

「ちよつと、聞いている！？」

俺の思考を停止させたのは映花の声だった。

「君には関係ない」

ほとんど言い訳だった。気の利いた返答を探すことができないまま、そんなことを口走る。

「もう、帰ってもいいか？」

溜息混じりにそう言った。もうこりこりだ。

「駄目に決まってるでしょ！」

映花がまた腕組みをする。俺は入り口に目を向ける。何人かの黒頭巾がそこに立ちふさがっていた。が、強行突破できなくもない。

「おかしいこと考えないでないでしょうね」

俺の視線に気付いたのか、映花が言った。

「それじゃあ、これが最後だ」

俺は映花の目を見る。

「説明してくれ」

「何を」

「全部だ。君と君たちの素性、何に属する執行委員なのか。俺をここに連れてきた理由」

「欲張りね」

「当然だ。もうからかうなよ」

「……いいわ。全部言ってあげる。もともと、そのつもりだったし」

映花はそう言うと、黒頭巾の群集に目配せをした。何人かの黒頭巾が室内の端に走っていく。数人がかりで持ってきたのはキャスターの付いたホワイトボードだった。

映花の後ろに配置される。

「それじゃあ始めるわ!」

そう言って後ろ手にホワイトボードを勢い良く叩く。その衝撃でホワイトボードの盤面は中心を軸にしてぐるりと回転し、盤面の上部が映花の頭に直撃した。

彼女が台の上につくまると、数人の黒頭巾が彼女に駆け寄り、憂慮の言葉を口にする。彼女はそれを手で制して立ち上がると、何事も無かったように胸を張った。

これから説明される彼女と、委員会とやらの素性、その正体の片鱗を見た気がした。

第3話 委員会 2（後書き）

読了感謝

第3話 委員会 3（前書き）

唐錦、いきます。

第3話 委員会 3

映花は振り向くと、ペンを取りキャップを外した。背伸びをしてホワイトボードに文字を書いていく。依然彼女は台の上に乗ったままで、見ていて危なっかしい。

一列の文字を書き終わると、こちらを振り向いた。俺は映花の頭越しにその文字を読む。

「私達は私立桜星 おうせい 学園高等部生徒会執行委員よ」

映花は自慢げにそう言った。結局言うのなら、文字を書く必要はなかったんじゃないのか。

「生徒会執行委員？」

「そ。んで、私がその委員長」

ペンで自分を差して彼女はそう言った。

「私立桜星学園の指標は自主・自立・責任。聞いたことあるでしょう？」

俺は昨日の校長の挨拶を思い出す。そういえば、そんなことを言っていた気がする。無論、話の内容など覚えていないが。

俺の返答を待たずに映花は続ける。

「それは上辺だけの言葉じゃないのよ。校長がドの付くほどの放任教育主義なものだから、生徒に任せられるモノはぜーんぶ生徒の仕事。各種校内イベントの企画・運営は勿論。校則の立案・廃止・施行までもが生徒任せ」

そして、と映花はボードを振り返る。

「それを代表して行うのが、生徒会。各委員会活動の統率。すべての部活動・同好会の管理。部費の割り振り。果ては生徒ひとりひとりの悩み相談。ほかに色々あるわ」

映花は生徒会。と書かれた文字の周りにくると円を書きながらそう言い終わると、そこから一本の線を伸ばす。

「その主要下部機関が私たち執行委員会。生徒会の決定を実行・

執行するのが役割ね」

線の先に、執行委員会。と書きながら映花は言った。

「と、ゆーわけで……」

映花はキャップが外れたままのペンの先端を俺に突きつける。

「あんたを執行委員に任命するわ！」

「断る」

「なんで!？」

突拍子もない勧誘をつき返した俺に、意表を突かれたように目を見開く映花。そんなに意外か。

「こっちの台詞だ。そこでどうして俺が出てくるんだよ。それに、あの黒頭巾達はなんだ」

俺は黒頭巾の群集を指差す。頭巾の通気性が悪いのか、息が少し上がっている者や、鼻の辺りが湿っている奴が何人かいた。

「あれはみんな委員よ。頭巾を被せたのはそれっぽくするため。別にいつも被っているわけじゃないわ。今日が初よ」

「それっぽく？」

「そ。おもしろいでしょ？」

おもしろい……？それだけの理由でこいつらは頭巾を被っているのか。

ふと、嫌な予感が頭をよぎる。

「まさか、俺を連れてきたのは……」

俺の疑問に、映花はまた腕組みをする。

「もちろん、おもしろそうだからよ」

啞然とする俺に、映花は構わず続けた。

「入学初日に心中未遂だなんて前代未聞よ。興味が湧いて当然じゃない」

なんという利己主義な女なんだ。冗談じゃない。こんな奴と関わっていたら、俺の描いていた孤独で静穏な学校生活が崩れてしまう。「九ノ瀬早矢の話は聞いていたけれど、あんたは思わぬダークホースだったわ」

映花が重ねた言葉に、思わず反応する。

「九ノ瀬？まさかあいつも」

「もちろん委員になってもらうわよ」

当然。といった様子で映花に返される。

「あつちは副委員長に任せてあるわ。ちよつと心配だけだね」

その心配は何を指しての心配なのか俺には分からなかったが、九ノ瀬も今、俺と同じ状況にあるというのは把握した。無論、彼女も委員など断っていると思うが。

「でもやつぱり気になるわね。ちよつと連絡してみようかしら……」
映花はそう言つと、上着のポケットから携帯電話を取り出し、どこかへかけたようだ。電話を耳に当てつつ俺を睨む。動くなよ、ということか。

どうやら相手と繋がつたらしく、幾度かの相槌のあと、映花の眉間に皺が寄る。

「何やってんのよ馬鹿眼鏡！！あんたの命に代えても探し出しなさい！！」

いきなりの罵声に圧倒される。電話の向こうから小さく悲鳴が漏れる。どうやら男性のようだ。映花はそう言つて乱暴に携帯電話をたたむと、舌打ちをしつつ俺を見る。表情は険しいままだ。

「九ノ瀬早矢が逃げたわ」

「みたいだな」

先ほどの罵声でなんとなく事情は分かった。しかし、九ノ瀬が逃げる姿というのは、なかなか想像し難いものがある。この部屋にいるほど向こうは人がいなかったのかもしれない。

「あんた、今日は帰っていいわよ」

突然の開放の言葉に面食らうも、九ノ瀬を探しにいくのだろうと思ひ至った。

「どうせ逃げられないしね」

「九ノ瀬には逃げられているじゃないか」

俺の皮肉に片目を細める。

「うつさいわね。なんなら私の名前でも書いておこうかしら？」

持っているペンを片手で振りながら不機嫌そうに言った。

「勘弁してくれ」

「……まあいいわ。返事はまた聞かせてもらうから。拒否権なんて無いけど。——ほら！あんた達！行くわよ！」

映花は俺から目を離し、黒頭巾の群れへと歩いていく。

「え、これ被ったままですか……？」

頭巾を被った女子生徒の一人が映花に言った。確かに映花の言うとおり、常に被っているわけではなさそうだ。

「あつたり前じゃない！脱いだら処刑よ！」

ざわめきとともに室内からぞろぞろと出て行く委員達がいなくなると、室内には俺と静寂だけが残った。

あれだけの人数の搜索から、九ノ瀬は逃げられるだろうか。しかし、わざわざ俺が探し出して助ける義理も無い。どちらにせよ、俺に見つけられるようなら、先に執行委員達が見つけているだろう。

俺は考えるのをやめて、出口へと向かった。

部屋を出ると、廊下があつた。薄汚れた窓から差し込む光に、舞った塵が照らされて光っている。人気はなく、造りこそ木造で古臭いものの、それが学校のつくりであると理解するのは一瞬だった。今いたのは教室で、角部屋に位置する場所のようだ。窓は目張りで塞がれ、黒板も取り外し、照明はダンライトになっているため教室の面影はほとんど無い。

廊下を進んで行き、他の教室を覗いた。机や椅子が乱雑して埃が積もっているが、教室そのままの形が残っている。

廃校舎。俺はそう直感した。学校の敷地にこんな場所があるとは知らなかった。敷地は確かに、異常と言える程広いが、配られた地図には載っていなかったはずだ。先ほどの一件が無かったら、俺は

ここを安息の地に決めていただろう。

この階は最上階だったようで、何度か階段を降りなければいけなかった。昇降口を抜けると、ある程度見慣れた景色が視界に入る。

しかし校舎の周辺の花壇や植木は整理されておらず、雑然となり、道には枯葉の絨毯が出来ていた。中世的なイメージの現校舎や付属施設から距離が離れているせいもあるのか、そこは異質な空間に感じた。まるで隔離施設のようだ。

肩に落ちた枯葉を払うと、俺は高等部の現校舎を目指して歩いていく。

桜星学園は小・中・高等部から成り、敷地も広い。東堂正樹から聞いた話だが、新入生が稀に迷子になり、移動授業に遅れるという話もあるくらいだ。中にはそのまま帰ってこない人もいた。という都市伝説もある。

だから俺が自分の教室に戻ってくる頃には、俺はすっかり息を切らしてしまっていた。この距離を、あの親衛隊達は俺を担ぎながらあの短時間で移動したのか。大したものだ。

放課後からかなり時間が経ったためか、校舎に生徒の姿はない。窓の外から運動部の弾んだ声が聞こえる。

俺は自分の席から鞆を回収すると、家路に着いた。

玄関を開け、ただいまと声を発するとともに、異変に気付いた。見慣れない靴がある。きちんと並べられた黒い革靴はサイズが小さく、おそらく女性のものだろう。

俺の声に気付いたのか、祖父が居間から顔を出す。

「おう勢一。おかえり。友達きてんぞ」

「友達？」

誰だ……。学校の人間に家の場所を言った覚えはない。ましてや女生徒。

「本人がそう言ってたから、お前の部屋で待ってもらってる。しかし意外だな。あんな可愛い子がお前の友達なんて。そもそもお前友達できるんだな!!」

何がおもしろいのか爆笑している祖父を横目に、俺は靴を脱いで階段を上る。

「あとで茶持ってくからな」

祖父の声は焦燥に掻き消された。一体誰が、何の目的で、俺の家に……。というか、勝手に部屋に入れるなよジジイ。空き部屋があるだろ。

高ぶる緊張の中、俺はゆっくりと自室のドアを開けた。

第3話 委員会 3（後書き）

読了感謝。思い立って連投しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6155v/>

リレー小説「恋愛編」

2011年11月12日19時00分発行